

信州昆虫資料館報

No.15

2018. 8



目次

今年スケジュール	……………	p 1
「舞姫たちよ 永遠に！」展 御礼	館長 野原未知	…………… p 3
老人になった虫とり少年たち(Ⅱ)	芦澤 一郎 (蝶話会メンバー)	…………… p 4
【コラム】 高山蝶について	中曽根久子 (自然愛好家)	…………… p 6
信州青木村 お蚕様プロジェクト		
「お蚕さん、大好き！」	高田玲子 (青木村児童センター所長)	…………… p 7
Zephyrus ゼフィルス展Ⅰ・Ⅱ		…………… p 9
民衆詩としての一石路俳句	奥村 和子 (朗読家)	…………… p 10
2017年を振り返って	野原未知	…………… p 12
編集後記		…………… p 21
裏表紙 夕陽の中の赤ちゃんカマキリ	田島 茂 (撮影)	



鎌倉蝶話会の皆さんと森に遊んで

★休館・火曜日 10:00～17:00 (11月は16:00) ★5月連休は無休
★入館料高校生以上300円 中学生以下無料
★各企画について、詳細はお問い合わせ下さい (0268-37-3988・fax37-3964)



今年のスケジュール

4月

● 4月20日(金)

春のオープン
Zephyrusゼフィルス展 パートⅡ～
当館2F特設ギャラリー

工夫された標本箱：新部公亮

蝶の木版画：廣田日出樹

蝶や虫の切り絵：長岡泰平

蝶の写真：向川靖彦・関口忠雄・田島茂・林清弘
成沢和昭・桐原重樹・高崎明・速水宏他

森の中にキラキラ舞うゼフィルス蝶の標本各種
絵やパネルなど随時展示

● 4月28日(土)

新設青木村道の駅及び
情報館グランドオープン



昆虫資料館ギャラリー（情報館内）

遊んで学んでまた遊ぶ

10時～4時・随時
館内多目的室・ロビー／要昼食

6月3日(日)

- 卓上手織り機で糸の織りなす色彩を楽しみながら織ってみよう
- 切り絵の蝶や虫を作ってみよう

7月8日(日)

- 卓上手織り機と草木編み機で遊ぼう

8月18日(土)

- 大正時代の座繰り機で糸採り体験をしよう

- 採った糸でランプを作ってみよう

- 真綿から糸を紡いでみよう
- 養蚕のお話を聴こう
- 切り絵の蝶を作ってみよう

9月8日(土) **要予約**

- 生糸のランプシェードを作ろう
お一人様ひとつずつ美しい作品をお持ち帰りいただけます。
定員15名・材料費別途

信州とあそぼ！

ミュージアムスタンプラリー 2018

7月14(土)～
9月2日(日)

信州にある多くの美術館・博物館・資料館・文学館・民俗館他が連携。アート・自然・文化・歴史により親しんでいただくための県の事業に参加しています。
遊んで学んでスタンプラリーを楽しみながら、プレゼントもGet！

主催・長野県・県教育委員会・県文化振興事業団

5月

●5月10日(木) 10時～

周辺の植物しらべと森の声を聴くⅠ

上田自然に親しむ会の皆さんと共に定点観測。春の森の草木や虫たちを知ろう！



●5月26日(土) 10時～ お弁当持参

子檀嶺岳村松風穴ハイキングと 沓掛小倉風穴・巨石群探索

青木村道の駅集合10時～村松西公民館P

今年も麓から子檀嶺岳900m地帯の風穴まで草木や石や虫、鳥たちを観察をしながらゆっくり登ります。午後、余力がありましたら沓掛の小倉風穴と巨石のある森を歩きます。温泉で解散。

(お弁当、レインコート、☂️道具・雨天中止)

6月

●6月1日(金)～

春蚕の飼育



今年も卵から孵化し、繭になるまでを飼育・観察します。中旬以降、終齢幼虫

になると、あっという間に桑葉が無くなりお腹を空かせてしまいます。桑葉のお土産を♪

7月

●7月12日(木) 10時～ お弁当持参

周辺の植物しらべと森の声を聴くⅡ

上田自然に親しむ会の皆さんと共に初夏の森の草木や虫たちを知ろう！

●7月15日(日) 13時半～

恒例ハチの講演会とコンサート

青木村文化会館2F

講師:当館名誉館長 小川原辰雄氏

毎年ハチに刺されて来る患者さんが絶えません。早い段階からハチ毒についての研究をされてこられたドクターのお話を拝聴しましょう。

終了後、10年来コラボレーションして下さった丸川尚子さん(歌)とコルナ知子さん(ピアノ)のコンサートもお楽しみに！(参加無料)

8月

●8月11日(土)祝 日没～

恒例夜間昆虫観察会

庭先に飛来する虫たち。ライトを浴びた宝石のような虫たちと、虫に集まる人間たちの舞い遊び。

蟬の神々しい羽化にも遭遇出来るかな？

昆虫大好き先生方や、すっかりマニアになった虫ガール、虫少年少女も参集！

早めから来られる方は、夕食などご持参下さい。

暗い山道、気を付けてお越しください。

(要/懐中電灯・カメラ・お茶)

9月

●9月15日(土)～11月30日(金)

全館 各資料展

マダラヤンマ保護研究会展：10年の活動資料・写真などを展示、故広瀬幸雄先生の上田地域の水生昆虫資料公開、当館周辺の植物展(上田自然に親しむ会の標本・写真)開催

●9月13日(木) 10時～

周辺の植物しらべと森の声を聴くⅢ

夏の終わりの森を歩こう！上田自然に親しむ会の皆さんと共に初秋の森を歩こう！(要昼食)

11月

●11月25日(日)

山に人にありがとう会

ここジストの会と共に、刈り込んだ草や木を集めて燃やします。毎年美味しい焼き芋が出来、1年の感謝を込めてランチパーティーを開きます。

●11月30日(金) 閉館

「舞姫たちよ 永遠に！」展 御礼

縄文以来

森の民として自然と共生し
平和を愛し

地産地消の循環型社会を
形成した日本人は

環境問題の本質を 世界でもっともよく
理解できる民族のDNAを持っている
日本人が
本来の 森の民に戻れる日を夢見て



鳩山邦夫

(地球に恩返しする本 2003 ポプラ社より抜粋)



小さくも心のこもった展覧会を！と心が動いたのは、2014年発行「浅間山麓と東信の蝶」に寄せられた鳩山さんの寄稿文のタイトル「舞姫たちよ 永遠に！」という8文字に出会ったことによります。

言葉の氾濫する世の中で一切を飛び越せる底力。葉のように薄い翅「蝶」を愛し続けた人の「舞姫たちよ 永遠に！」に共鳴^{ともな}りし、受け止めたような不思議な一瞬がこの旅の始まりでした。

起承転結約1年の旅は、多くの皆さまの心に浸透しながら閉館まで続きました。このかけがえのない

日々を、鳩山さんへの「追悼」として捧げます。

そして上記に掲げました鳩山さんの言葉を改めて皆さまにお伝えしたいと思います。

ご協力くださいましたすべての皆様、この山の上までお運び下さいました皆さまに、心より感謝申し上げます。

本当にありがとうございました。

2018. 3月

館長 野原未知

老人になった虫とり少年たち (Ⅱ)

The insect boys who became old men
The 11th Conference at Aoki Village, Nagano Pref., 2017

芦澤一郎 Ichirou Ashizawa

2017年9月30日～10月1日、長野県青木村の信州昆虫資料館で第11回鎌倉蝶話会がかつての昆虫少年11名が集まって開催された。9月30日は東京駅、大宮駅から会員が長野新幹線「はくたか559号」に乗り、上田駅で合流した。

上田駅には信州昆虫資料館館長の野原未知さんたちスタッフが待っていて、車に分乗して名誉館長小川原辰雄氏宅にて昼食、その後資料館で鎌倉蝶話会が開催された。宿泊は田沢温泉の歴史あるますや旅館。翌10月1日は資料館周辺を地元のこどもたちとその家族の方たちと一緒に自然観察を行い、昼食後寄せ書きを書いて資料館を後にして上田駅に向かった。2日間とも天気に恵まれ、資料館のスタッフ一同に手厚くもてなされ、信州の秋を満喫した2日間であった。

〈信州昆虫資料館〉

信州昆虫資料館は旧農協の宿泊保養施設を昆虫館として改装したもので、2003年に開館した。鉄筋コンクリートの立派な施設である。

田沢温泉から3.5kmほど登った標高約1000mの雑木林に囲まれた自然豊かなところにあり、野外観察



にはもってこの場所にある。館内には国内外の昆虫標本、文献、山田靖氏の昆虫画の常設展示室、栗田貞多男氏の写真ギャラリー、館創設者小川原辰雄氏のハチ展示コーナー、養蚕展示コーナーなどがあり、じっ

くり時間をかけて見学したいところである。

また館内には昆虫画作品やオブジェが多数展示されている。昆虫グッズを収集している筆者にとって、どれもすばらしいものばかりであった。「桜材で作った精巧な蝶」の作者加納貴弘氏は逗子市在住で、以前筆者や柳本茂氏が所属する「三浦半島昆虫研究会」の例会で多くの作品を披露してくれたことがあった。

〈長野新幹線〉

行きの新幹線は「はくたか559号」であった。あまり新幹線に乗ったことがない筆者にとっては内心うきうきしていた。長野新幹線はもちろん初めてである。隣席は養老孟司氏である。ちょっと緊張したが、ラオスのゾウムシの変った分布やゾウムシの口器の話、奄美大島の風土病の象皮病の調査や毒蛇ハブの話など興味深い話をしていただいた。奄美群島は1969年初渡島以来40回訪れているが、もっと前に滞在していた頃の養老氏の話は興味津々であった。

〈小川原邸での昼食〉

上田駅からは先ず筑北村の小川原辰雄（信州昆虫資料館名誉館長）邸に向かった。筑北村は資料館のある青木村と西北側で隣接する村である。旧家の大きなお屋敷ですばらしい豪邸である。いくつかの部屋に分かれて、息子さんや診療所の看護婦さんたちの心づくしの昼食をいただく。おやき、ニジマスのからあげ、蕎麦、種類の多かった漬物などどれもおいしかった。

〈第11回鎌倉蝶話会〉

昼食後、青木村の信州昆虫資料館に移動した。針葉樹の多いやや狭い道をどんどん車は登っていく。



資料館に近づくとも葉樹が増えて来る。広い駐車場もあり、すばらしい環境の中にあつた。館内を少し見学して2階の講義室へ移動し、鎌倉蝶話会が始まった。今回は小川原氏、蝶仲間である善光寺近くの十念寺ご住職「虫めずる僧正」こと袖山栄眞氏やご家族、虫仲間たちも参加した。

「鎌倉蝶話会」の今回の幹事である原田基弘氏の司会で会は始まった。

最初は牧林功氏がザルモクシスアゲハについて発表した。この蝶は♂の標本はそれほど珍しくはないが、♀がとても少ないそうである。成虫の脈相がPapilioとは明らかに異なり、Papilioと一緒にしておくのはどうかと疑問を述べた。胸部斑紋、翅の色などもPapilioに所属するには無理がありそうということであった。

続いて柳本茂氏が三浦半島で発生したクロマダラソテツシジミについて発表した。三浦半島では2009年、2011年、2014年、2016年に確認されているが、2017年にも逗子市で確認されたそうである。ソテツの新芽、新葉がある場所では注意していきたいとのことであった。

三番目は中谷貴壽氏の「蝶類採集用具の変遷史」である。多くの図を使って国内外の採集用具を紹介した。昆虫針の長さの違いは標本棚の大きさの違いであるとか、展翅版の形など興味深い内容であった。

最後は原田基弘氏である。「雲南省維西に蝶を追う」というもので、最新の中国雲南省の蝶の紹介を行った。

ソテツにいたクロマダラソテツシジミ、ソバを食べるウラフチベニシジミ、ミスジチョウ、カラス



アゲハの仲間、アサギマダラと混飛するよく似たAldamia imitansなどが興味深かった。

〈ますや旅館〉

この旅館は田沢温泉内にあり、島崎藤村が宿泊していた宿としてよく知られている。また松坂慶子、牧瀬里穂などが出演した映画「卓球温泉」(1998年制作)の撮影地でもあり、関連のポスターや色紙が飾られていた。「子宝の湯」は源泉掛け流しの湯である。

夕食は「鎌倉蝶話会」会員11名に信州昆虫資料館館長の野原未知さん、名誉館長の小川原辰雄氏、袖山栄眞氏とそのご家族も参加され、キノコなど豊富な山菜料理とにごり酒を味わいながらなごやかに宴は進んでいった。

今年は不作だという松茸も鍋、松茸ご飯、土瓶蒸しに調理されていて、その香りと味には皆満足していたようだった。アルコールが入ってくると、「鎌倉蝶話会」の会員の舌が滑らかになっていったようで、「鎌倉蝶話会」→「鎌倉チョー若い!」などという声も上がっていた。夕食後は隣室でお茶を飲みながらさらに楽しい蝶話は続いていった。



〈再び信州昆虫資料館〉

ますや旅館で朝食を終えて、また信州昆虫資料館へ移動した。2日目の10月1日は地元のこどもたちと一緒に資料館の周りを「鎌倉蝶話会」会員と観察する予定が組まれていた。資料館の周りはやや暗い広葉樹の林が多かったが、明るい林や草地もあり、時期がよければ多くの昆虫たちに会えそうだと感じた。

蝶はクモガタヒョウモン、ウラギンヒョウモン、キチョウ、モンキチョウ、キタテハ、イチモンジセセリなど。アサマイチモンジもいたようだ。草地にはバッタの仲間が多く、ナツアカネが多数飛んでいた。こどもたちは採集した虫を「鎌倉蝶話会」会員に持ち寄って説明を受けていた。

林道に60cmほどのヤマカガシがいて首を広げて威嚇していた。頭を押さえて右手で尾をつかみ、こどもたちに簡単な説明をしながら見せると、何人かのこどもがヤマカガシに触れてサラサラしていると言っていた。やはりこどもはこうでなきゃ。



素手でヤマカガシを持ちお話しする芦澤さん

皆で記念写真を撮って、11時半頃に観察会は終了した。資料館のロビーで恒例の寄せ書きを書いた。ちょうど居合わせたブレイクダンスのチャンピオンがすばらしいパフォーマンスを披露してくれたのはラッキーであった。用意された昼食のお弁当を食べて上田駅まで向かう。



長野発の新幹線あさま618号にちょうど間に合った。自由席も余裕があり、皆が座れたのはよかった。これも上田駅まで送っていただいたお陰であろう。大宮駅下車の会員と別れ、東京駅でも再会を期して別れて「第11回鎌倉蝶話会」は無事に終えることができた。

「信州昆虫資料館」の野原未知館長、スタッフの大川心一さん、他ボランティアの皆様には滞在中何から何までお世話になり、心から感謝いたします。

小川原辰雄氏、袖山栄真氏にも大変お世話になりました。そして幹事の原田基弘氏には今回の計画、運営にご尽力いただき、すばらしい体験となったと思います。最後になりましたが皆様に心よりお礼申し上げます。(あしざわいちろう/2017年10月10日)



column

コラム

高山蝶について

中曽根 久子 (千曲市在住)

毎年山歩きをしながら、チョウや植物、鳥たちを楽しんでいます。5月の下旬から6月の初旬にかけてミヤマハタザオ、イワハタザオの花が咲き始めると、天然記念物の貴重なクモツマキチョウが舞いはじめる処があります。1000m～2000m級の高山

に生息しているのですが、その姿を観ることができるのがクモツマキチョウ本当に嬉しいです。私たちが生息地を踏み荒らさないよう気をつけています。これからずっと、チョウたちと共に春を迎えられますように。



信州青木村 お蚕様プロジェクト 「お蚕さん、大好き！」

青木村児童センター所長 高田玲子

学校が終わり、子どもたちが児童センターに帰ってきました。
まず玄関にいるお蚕さんに挨拶です。

「お蚕さん、ただいまー！」

「昨日より大きくなって。毎日どんどん大きくなるね。」

「皮があるよ。ここにも…こっちにもある。脱皮したんだ。」

「あ、うんちが出てきた。お蚕さんのうんちはチョコチップみたいだな。」

「お蚕さんの顔は新幹線にそっくりだ。」

お蚕さんを囲みながら、子どもたちのお蚕さん話はずみずみ。お蚕さんを手に乗せたり、頭に乗せたり、頬ずりをしたり…毎日愛情いっぱいにお世話をしました。



おばあちゃんがお孫さんのお迎えにやってきて、お蚕さんに気付き声をあげました。

「えーっ、もしかしてお蚕さん？うわあー懐かしい。何年ぶりかなあ、50年ぶりだわ。おばあちゃんが子どもの頃は、どの家でもお蚕さんを飼っていたよ。朝は畑で桑を採ってお蚕さんにあげてから学校へいったもんだ。おばあちゃんはお蚕さんのお金で

学校に出してもらった…。」

お蚕さんを一緒にのぞき込むお孫さんに、おばあちゃんは懐かしそうに自分が子どもだった頃の話をしていました。

信州青木村お蚕様プロジェクトは信州昆虫資料館が村営になったことを機に、養蚕が盛んだった当時の体験をされた方々のお話を聞き、実際に蚕を飼ってみようということで平成28年6月に始まりました。



信州大学繊維学部の森川英明先生、金勝廉介先生のご指導をいただきながら、信州昆虫資料館、レポートあおき、青木村児童センターで実施されることになりました。

児童センターでは信州大学からいただいた約150匹のお蚕さんを、子どもたちとセンター職員でお世話をする生活がこの時から始まりました。

なかには虫が苦手な子どもがいましたが、みんないつの間にかお蚕さんが大好きになっていました。お蚕さんが食べる桑を準備するために村の中をま

わっていると、毎日何気なく通り過ぎていた道路のわきに、桑の木がたくさんあることに初めて気づきました。私たちが採ってきた桑の葉を一生懸命に食べるお蚕さんの姿を、時間が経つのも忘れて眺めました。

お蚕さんとの初めての生活は、何もかもが驚きと感動の連続でした。

6月から飼いはじめたお蚕さんは7月には繭を作り始めました。

子どもたちと一緒にトイレットペーパーの芯を輪切りにして貼り合わせ、手作りの『まぶし』（お蚕さんが繭を作る足場）を作りました。まだ薄い繭に懐中電灯の光を当ててみると、繭の中で一生懸命糸をかけているお蚕さんが見え、けなげな姿に感動しました。

夏休み前にはみんな無事に真っ白いきれいな繭になりました。また、以前養蚕をしていた方から、実際に使っていた『回転まぶし』『くれ台』『蚕箔』『ひきぼん』などを寄贈していただきました。

児童センターでのこの体験がきっかけで「お蚕さんを自分の手で育ててみたい」と夏休みの自由研究に選び、お家の方と一緒にお蚕さんを育てた子どももいました。

平成28年度の夏休みには信州昆虫資料館で、座繰り機による糸引き体験が行われました。児童センターの繭も昆虫資料館の繭と一緒に座繰り機にかけられました。子どもたちはバスに乗って昆虫資料館へ行き、座繰り機のハンドルを交代で回して自分たちがお世話をした繭から絹糸を取り出しました。規



則正しく巻き取られ上品なつやを持つ糸は、お蚕さんが懸命に糸をはいていた姿と重なり、とても尊く感じられました。

平成29年度は新しく信州大学からいただいた蚕と、昨年度児童センターで採取した卵から生まれた蚕を育て、約2700個の繭ができました。たくさんできた繭で、『絹糸の行灯作り』に挑戦しました。『絹の行灯』は金勝廉介先生が、子どもたち一人ひとりが自分の手で作れるよう、試行錯誤を繰り返して考えてくださったものです。

行灯は茹でた繭から糸を取り出して40本ほど束ね、膨らました風船に巻きつけて作ります。一つ作るのに1時間程かかりますが、子どもたちは黙々と製作に励みました。よく乾燥させたあと風船の空気を抜いて、中にLEDエッグライトを入れた行灯は美しく七色に光り始めました。



愛情をこめて育てたお蚕さんの繭から、世界にたった一つだけの行灯が出来上がりました。きっと子どもたちのそばで、優しい灯りをともし続けることと思います。

現在、化学繊維に囲まれた生活をしている私たちですが、絹糸はお蚕さんの命が吹き込まれ、人々の汗と努力のたまもので紡がれた尊いものです。

今では役目を終えた養蚕の道具を見るにつけ、自分たちで育てた蚕の繭から糸を引き出す体験をしてみ、青木村をはじめ養蚕に取り組んできたこの地区の人々や歴史に、思いを馳せることができたような気がしました。

そして何よりもお蚕さんはとてもかわいく心が癒され、大人はもちろん子どもたちの心の安定にもつながったと思います。

信州青木村お蚕様プロジェクトに参加し、このような機会をいただいたことに感謝しています。これからも子どもたちとお蚕さんに親しんでいきます。

Zephyrus ゼフィルス展 I・II

— 愛の女神「ヴィーナスの誕生」は15世紀ルネッサンスの名作として、フィレンツェの画家ボッティチェリによって描かれた。画面左上には頬を膨らませた西の風ゼフィロスがクロリスを抱きかかえながら貝に乗ったヴィーナスを岸边へと吹き寄せている。ミドリシジミの愛称Zephyrusはこの風の神ゼフィロスから名づけられた。

ゼフィルスと呼ばれるシジミチョウの一群は、東アジアを中心にして日本にも25種生息しており、初夏の森に誕生し、そよ風と陽光の中を飛び交う森の宝石たちである。(栗田貞多男著・ゼフィルスの森・1993年/株クレオ発行、ゼフィルスの旅より) —

1993年に発行された栗田さんの「ゼフィルスの森」は、多くの蝶愛好家にとって大きな指針となるものだった。

昨年の鳩山邦夫さん追悼展に、新部公亮さんは長野県で見られるゼフィルス22種「ヴィーナスの誕生」の絵をベースにした22箱の標本箱を展示して下さった。この冬、村の郷土美術館に打診したところ山崎館長さんは綺麗ですねえ、やりましょうと仰って下さり、かくして真冬の美術館のエントランスホールは新部さん制作の標本と廣田日出樹さんの木版画、蝶の写真撮影の皆さんのゼフィルス作品、そして鎌倉蝶話会・柳本茂さんのクロマダラソテツシジミの美しい標本と共に初夏の様相となった。標本のすべては栃木県の蝶愛好家・故西山隆さんのもので、新部さんに寄贈された。その美しい標本を生かしたく、



このような制作をしたとのこと。

2月1日～3月25日の会期。3月11日、新部さんにギャラリートークをして戴いた。長野県内で見られる22種のゼフィルスを丁寧にお話しくださり、40名の参加者の傾聴があった。

時に私が一石路を知ったのは館報No2(2007)に寄せられた「ファーブルと一石路」に依る。執筆は当時の美術館長櫻田義文さん。

ファーブルの昆虫記第1巻(大正11年10月叢文閣発行)を獄中で訳した大杉栄のことは当館にある同書7刷昭和3年の本を開きながら来館者にお話ししていたものだった。最終巻迄翻訳することを楽しみにしていたらう仏文学者大杉が、翌年の関東大震災時の騒然の中、妻・甥(6歳)と共に虐殺された。この日本が辿った事実の只中に一石路という人物も存在し、大杉が訳した第1巻を手にしていただけ深い。

初夏は当館の森にもゼフィルスが舞う。今年が開館から8月20日まで、館内特設会場で引き続きゼフィルス展IIを開催している。森の中で木洩れ日を受けてキラキラ舞うゼフィルスの可愛らしくも美しい姿を留めている

会場に、是非お運びくださいますよう。

青木村に来て初めて美術館を訪ね、句碑の前に立った時、その石の上に一頭の蝶が止まっていたことが甦る。

あれは、ゼフィルスだったろうか。(野原)



ゼフィルス展II会場(当館2F)

民衆詩としての一石路俳句



栗林 一石路

戦争をやめろと

叫べない叫びをあげている舞台だ

「檻の俳句館」に入ると先ず目につくのがこの句。
 作者は栗林一石路（1894～1961）青木村出身の俳人にしてジャーナリストです。「檻の俳句館」は今年2月25日、塩田槐多庵わきに建立された「俳句弾圧不忘の碑」に隣接する建物です。碑の除幕式当日に開館しました。敗戦の後に廃止された「治安維持法」に違反したとして少なくとも計44人の俳人が検挙されたのは1940年～43年です。大戦中軍国主義に俳句を以って抵抗した俳人たちの存在を知ったマブソン青眼さん（比較文学者・一茶研究家・俳人・長野市在住）は彼らの事蹟に母国フランスのレジスタンス活動と重なる精神性を見て、日仏対訳「日本レジスタンス俳句撰」を一昨年パリで上梓しました。このことが、師の金子兜太さんを動かし窪島誠一郎さん（無言館館主・作家）の敷地提供という大賛同を得て、70人に及ぶ呼びかけ人と550人を超える協賛者とともに顕彰碑建立に至りました。碑には金子兜太師の揮毫による「俳句弾圧不忘の碑」の銘と、17句が撰ばれ刻まれています。「檻の俳句館」では、それら17句を詠んだ俳人について、より詳しく知ることができます。一石路もその一人でした。

1925（大正14）年から1945（昭和20）年10月15日連合軍占領軍総司令部（GHQ）の指令により廃止されるまで20年にわたり日本の言論・思想・政治を弾圧してきたのが治安維持法です。1910（明治44）年の「大逆事件」に際して警視庁に特設された「特別高等課」は、1928（昭和3）年までには全国規模となり「特高」と呼ばれた刑事たちが尾行・連行で市民生活を脅かし、暴力的な尋問・拷問の実行者となりました。

5月25日は雑草忌。一石路の命日ですが、ジャーナリスト栗林農夫（たみお・一石路の本名）の、おそらくは初仕事となる「青木時報」を創刊したのが1921年の、やはり5月25日でした。塩田出身の横関愛造が、総合雑誌「改造」の編集長であった縁を頼って妻と共に上京した年の9月、関東大震災に遭い、横関に命じられるまま東京市中を取材します。その成果を認められ、一石路は10月、臨時雇いとして勤めることになったのでした。

翌1924年、晴れて改造社の正社員と決まり、4月23日神田の古本屋で見つけたのがファーブル著「自然科学の話」でした。本の力はたちまち彼を捉えたとみえます。早速購入、29日には同僚の比嘉さんに借りて「昆虫記」を読み始め5月1日には大杉栄訳アンリ・ファーブル著「昆虫記」第一巻を古本屋で探し出して我がものにするという傾倒ぶりでした。しかし、生活者としてジャーナリストとしての彼のまなざしは、単に虫めづるのみにはとどまらぬきびしさが伴います。

夕蜘蛛見おる子とふるさとの父の顔
 つづれさせぼろさせの夜になった妻
 羽蟻のように梅雨晴れの女工らが出てくる
 原爆忌頭を貫いて朝のかなかな

と、作句するのです。蚕を題材にするにしてもいわゆる花鳥諷詠の域に落ち着くのを潔しとせず、専ら産業としての養蚕に焦点を当てました。例えば

お話にならぬ蚕がしんしんと桑を食う
危機は春挽きの繭もない工場の一
一九三五年の輪飾
繭の値のきょうはすこしよい話を墓道
へつづく
値の良い蚕を信ぜず早の草を刈る
兵おくる家々くらき夏蚕かな



メスアカミドリシジミ 2018 田島茂

という具合です。

美術館の近く、大法寺入り口にある一石路の句碑は

シャツ雑草にぶっかけておく

ですが、自釈に依れば夏の暑い日多摩川での作です。「川原には夏草が猛々しく生い茂っていた。それに汗のしみとおったシャツがひろげて干してあった。じりじりと焼けつくような炎天である。どこからともなくガリンガリンという音がきこえてくる。見るとそれは真裸で日にやけた人夫たちが汗みどろになって砂利を掘っているのであった。するとあのシャツはこの人夫たちのものである。(以下略)」

一石路は労働者として共感をもって詠みました。



「檻の俳句館」の掲出句に云う舞台は築地小劇場。レマルクの「西部戦線異状なし」を観ての作です。一兵士の戦死と共に戦場に舞う蝶ひとつ。同名の映画はそのラストシーンが強烈な印象となりました。

あらためて読むと現在の私達にひしひしと共感を迫るものがあります。

「われわれは、俳句が民衆の詩として生まれ、民衆に愛されつつ発達してきた詩であるということに深い意義を感じるものであります。」1946年5月12日新俳句人連盟創立大会で、一石路は初代幹事長に推されました。その時発表されたのが上記の設立趣意書です。この認識に基づいて読まれた句が治安維持法によって不当な弾圧の対象となり、前記趣意書によれば「俳句またこれに便乗して反動化し」となった歴史の事実から決して目をそむけることなく表現の自由をあくまで守っていかねばなりません。

同年11月新俳句人連盟によって世に出た俳誌「俳句人」は今年創刊72年を迎えます。

奥村 和子 (2018. 6.15)

—俳句は「私は何をしたか」第10章より。

新俳句人連盟設立趣意書は、同書の228～229ページより—

2017年を振り返って

1月～4月

追悼鳩山邦夫さん展準備。

60年来の蝶の愛好・研究者であった鳩山さんを偲び、紹介する目的で展覧会を企画。鳩山夫人ご快諾の元、日本昆虫協会长野支部・栃木県マロニエ昆虫館様の共催、賛助協力を得た。後援、協力に日本鱗翅学会・日本チョウ類学会・日本チョウ類保全協会・県環境保全協会・八十二文化財団・鎌倉蝶話会・上田市マダラヤンマの会・地球を楽しむ会・青木村教育委員会・農業委員会・自然を守る会・女性団体連絡会・商工会。

実働部隊は当館のお友達の皆さん（サポーターズ倶楽部）。鳩山さんの蝶の標本10箱と虫採り網や三角缶（蝶が傷まないように入れる器）等採集グッズ、帽子にTシャツにズボン、長靴、シャベル、中学生時代の採集ノート、拡大眼鏡他エミリ夫人がご持参くださる。チョウ乱舞する山中で笑う邦夫氏の写真を正面に据え、友人の長岡勝さんの標本4箱と共に展示した。オオウラギンヒョウモン、キリシマミドリシジミ、ヒサマツミドリシジミ、オオルリシジミ、ヤマキチョウ、キベリタテハなど賑やかな会場になった。東京大学博物館矢後勝也さんの追悼文、富永滋さんの思い出の記のパネル、昆虫協会长野支部の「蝶飼う日々」のパネルや標本箱。また、別室に新部公亮さんコーディネートしたの標本箱22箱も並び、哀悼の会場になった。各昆虫関係の方々に追悼の色紙を依頼したところ、順次直筆の色紙が届く。木曜



社の西山さんや新部さんを通して送って下さった方々も多く、地元長野では昆虫協会长野支部他。色紙提供は、藤岡知夫・西山保典・奥本大三郎・岡田朝雄・小林準治・大藤敏行・森一弘・越尾淑子・杠隆史・大野義紹・岸田功・早野育男・養老孟司・平賀壮太・柳本茂・牧林功・原田基弘・寺章夫・今井彰・袖山榮真・栗田貞多男・長岡勝（敬称略）各氏、他各地故人の色紙が寄せられた。寄せ書きに茅野實・荻原邦夫・今井彰・小川原辰雄・栗田貞多男・野原の5名。（敬称略）館報No.13に当館訪問と鱗粉転写の記事を下された白川英樹先生は、色紙の代わりにと中学生時代に作られた貴重なチョウの鱗粉転写作品15枚を送って下さった。

4月

松本市のチョウ愛好家浜栄一さん、長野市の氷室淑さんが逝去される。

お二人とも長野県の蝶界を率いる重鎮だった。

浜先生の同輩、後輩の方々はとても多く、一様にその暖かいお人柄についてお話しされる。昆虫の図鑑や本、新聞などの活字でしか知らぬまま、一昨年の松本展最終日に参じたものの会場を間違えついに お会い出来なかった。が、松本市の館友小林裕司さんがよく浜先生のお話しをして下さる。

虫への愛情が、そのまま人や人の世への慈悲になっている姿は長野の氷室淑さんや昆虫画の山田靖さんの心にも繋がる。

氷室さん代表の会誌「カラコルム」を通読されている皆さんもやってくる。氷室さんの誠実なお姿は多くの虫仲間を得られ、当館にもひょっこり顔を出して下さった。地道な調査を継続されながら蝶を楽しまれて来た。ご家族さまから会誌No.77号と4月付けのお便りが届いた。さらにカラコルム1号からの会誌データも送って下さった。長野の蝶史を語るデータでもある。No.1（昭和58年2月4日発行）は氷室さんの手書きによる。執筆者にびっくりした。先ずは青沼邦信さん「蝶と旅」、次に栗田貞多さん

による「私の一番好きな蝶について」。そして櫻井群晃さんの「雑感」。さらに当館に沢山の標本を寄贈されたままこの世を去った若い頃の中島俊樹さん。そしてすでに他界されている長崎進氏「テングチョウは、越冬個体が4月 ひとつの提案」と続く。

氷室さんの『「蝶の生活・新村太郎著」をむさぼり読んだ頃のこと』というタイトル。そして次に蛭川憲男さんによる「不殺生」。佐藤正義さん「オオヒカゲは何故、千曲川の東側にいないのか」に続き、最後に何と小川原辰雄先生による「プライヤー鎮魂」。そして77号（最終号）トップに氷室さん「食べているおにぎりに飛来したコムラサキ」。

1993年7月29日、鳥々から進んだ溪谷沿いでおにぎりを拵げたら、コムラサキがやって来て昆布に口吻を伸ばし吸蜜と。その画像が表紙を飾り、氷室さんはその3分の1を集大成のように蝶の観察記録で埋めた。最後にテングチョウの大群集を飾る。

32ページの増大号には山崎浩希さん、浜栄一さん、浅輪範行さん、伊藤寿さん、新海正也さんが名を連ねる。新海さんは大学生の頃当館に来て下さり、展示のいくつかの間違いを教えて下さったのでよく覚えている。そして、浜さんがカラコラム最終号となった77号にヤマキチョウらしき♂1頭について寄せている。まさか追いかけて逝ったかと思えなくもない。

会誌を開く度に、氷室さんと浜さんの名コンビが大活躍されていたことを知ることになった。同じ4月に相次いでいったい何処まで舞っていったのか。

長年の皆様のお名前が懐かしく思い出されるカラコラムはそのまま長野の蝶史のようだ。この貴重な会誌1号から77号をPDFにまとめ、ご丁寧なご挨拶と共に私に送って下さった奥様の氷室賀代子様、ご子息の氷室 禎様、娘さんの高橋美奈さまに、心より感謝申し上げます。

会員の皆様のご許諾も頂いてあるとお便り、会員の皆様にも心より感謝申し上げます。(2018. 1記)

木曜社西山さん、名誌「ツー・イー・ソー」読者700名様に追悼展のパンフを入れてくださる。

月刊し、日本チョウ類保全協会、昆虫協会长野支部他、各誌でPRして下さる。

22日
春のオープン。

29日
「舞姫たちよ 永遠に！」展オープン。

オープニングレセプションに鳩山邦夫さんのご家族さま方がご来館くださる。ご長男太郎さん、日本昆虫協会长野支部長茅野實さん、北村村長、名誉館長小川原ドクターのご挨拶を戴く。太郎氏は懐かしいお父さんの思い出を語ってくださり、一同邦夫氏を偲ぶ気持ちが募る。長野市より袖山栄真さん、栗田貞多男さん、東御市より花岡敏道さん他、信州大学繊維学部の下坂教授、村の小林和雄さん、山本悟さん、宮原弘子さん、清水よしえさん、岩田温子さん、田中裕子さん、当館応援団の皆さん、商工観光移住課新津課長、津田さん他、内外約50名のご参加。村在住のコルナ知子さんのピアノ演奏でオープニングに花を添えて頂く。哀悼の意を込めながらも和やかな一日となる。

5月.....
鳩山由紀夫さんご夫妻がお見えになる。

ご夫妻が玄関に立ち、開口一番「弟の追悼展をありがとうございます」と深々と頭を下げられた。邦夫さんとの蝶の思い出を懐かしくお話しされ、全館ゆっくりご覧くださる。いいお天気の日で2階ベランダからの眺望もよく、小さな命にむける眼差しの優しさを感じさせていただいた。

当館ビデオサポーターの成沢和昭さん、チョウの動画でNHKビデオコンクール優秀賞を受賞される。

子檀嶺岳の風穴ハイキングと蚕種取り出し。

爽やかな森を歩き、蚕種を取り出す。お昼後沓掛の風穴と巨石群も見学。和やかなメンバー総勢20名。東御市の山崎様、アサギマダラの食草フジバカマをご持参当館庭先に植えてくださる。小諸から電車バスを乗り継いで来られたお客様、麓のバスターミナルから徒歩でお見えになる。

蝶類研究者で応用工学研究所理事長の藤岡和夫氏が奥様と上田駅からタクシーでご来館。ゆっくりご見学ののち、長い下り坂を歩いて降りる道中で動けなくなっておられた。東大博物館の矢後勝也先生を

ご案内しながら登って発見！ご高齢なのに無理をされて（無茶されて）と、心配しながらも矢後先生の車で麓の田沢温泉まで送って頂くことにし館に戻った。が、矢後先生待てど暮らせど戻られない。旅館にも着いてないという。まさか慣れぬ山道で車ごとひっくり返っていたらどうしよう、いよいよ探しに行こうと思ったところへ帰って来られた。

聴けば、麓まじかのカーブで蝶舞う姿を見たとなん「停めてくれ（車を）！」と藤岡さん。停めたらやにわに飛び出して、長いこと網を振って蝶と戯れていたと。嬉々と収穫のアオバセセリの話になる。胸をなでおろしつつ、「かつての昆虫少年いまも健在」を臨場感を以って見せていただいた訳だ。

このように多くの皆さまが青木の山まで鳩山作品に逢いに来られる。最終バス停からの交通手段がなく申し訳ない。東御市でオオルリシジミの観察会あり、館員大川さんが参加。古い座繰機の部品を大工増田直之さんに作ってもらう。

6月

蝶類学会横地隆さん豊田市よりご来館。

麓の田沢温泉にご一泊。蚕の孵化が始まる。児童センターからの蚕種（新年度の日中交雑種）、当館ロビーにて越冬した蚕種、村松風穴で越冬した蚕種と3様の飼育が始まる。



武田智也さんの記録（佐久穂小学校5年生）

数日の違いですべて孵化する。絵本作家の中山れいこさんとイラストレーター新井さんご来館。情報たっぷりの分かり易い絵本形式の本、カイコ・アゲハチョウなど著書を戴く。田沢温泉ご一泊後、翌日山梨県にある農業資源研究所訪問に同行。

生きもの大好き武田智也君（佐久穂小5年）に蚕や卵を分ける。翌日風穴蚕種が孵化を始めたご連絡有。若い仲間出現！知也君は蚕の飼育中、桑を採っているときに蚕の原種であるクワコを見つけ、クワコの飼育観察もする。その過程を記録し、模造紙に写真やクワコの繭を添付して当館に持って来てくださったので、前橋の東野さんの記録と共に全国風穴サミット小諸会場の当館ブースに展示する。



東野恵子さんの記録（前橋市）

上田市片桐眞次郎ご夫妻様、小諸市清水寛美さんそれぞれに蚕種を引き受けて下さり飼育をしていただく。片桐さんは初めての養蚕に丁寧に向き合っておられ苦労された。清水さんは、小諸の蚕業の歴史を調べたり、飼育を通して、絹糸という物をさらに深く捉えておられた。彼女は着物の仕立て屋さんでもある。麓の宮入和夫、幸枝さんご夫妻が昆虫館飼育を手伝って下さる。桑摘み作業・糞の掃除・新しい桑を繰り返し、ひきてきたら「まぶし」に入れる。上田商工会議所の皆さんゆっくりご高覧。



清水寛美さん作成繭と絹糸グッズ

6月21日

鳩山邦夫さん一周忌

入館料を無料にする。木曜社西山さんと河合さんご来館され、麓の温泉お泊り。おひさまクラブの皆さん子供50名先生10名、いつも元気な光と風の子たちが今年もやってきた。

みんな鳩山展会場楽しまれる。チョウ類保全協会の白土さん保科さんご来館、麓の温泉泊。松代オオムラサキの会と青木自然を守る会で館内見学と会合を持たれる。北村文治氏が見える。環境保全を含めた熱意ある話し合いがされる。

7月

蚕たち、順次繭になる。

標本寄贈者の名取健一さんがお友達と共にご来館される。片桐さん夫妻が自作のまぶしで蚕が繭になったとそのままご持参。自作の大きな飼育箱4箱も頂き、早速当館の3齢～終齢幼虫たちの家にする。坂戸市中学生体験留学で、全館ご案内と説明をする。佐久市社協の40名様全館ご案内。上田の小野沢さん、自宅庭先のおがくずで繁殖したカブトムシを沢山持ってこられる。来館の子供たちにプレゼントする。連日蚕の世話に追われる。

17日

当開館当初からの長年の友人で。

サポートして下さった鈴木繁男さんが、ご自分の畑の在った奈良本の山道で事故で亡くなられる。当館開館以来。ほぼ全ての企画や行事ごとにお見えになり、御尽力頂いた。チョウの愛好のみならず、野菜作りやパソコン関係他博識は留まることがなかった。20日の告別式に小川原先生とサポーター仲間8名と共にご焼香に参じる。心よりご冥福をお祈り申し上げます。鈴木さんの標本コーナーを、どうぞご高覧頂けると幸いです。 合掌

22日午前中

東御市にてオオムラサキの観察会参加。

村の国吉さん今年も周辺他草刈りをして下さる。トンボ研究家の木村茂氏、東京築地ふげん社ギャラリーにて初個展。ヤンマ13種の精密画の作品は、日頃の木村さんの人柄のままにて繊細さと、いかにも

自然見のおおらかさが見て取れる水彩彩色の作品。当館にギンヤンマのリトグラフを寄贈されている。

当館庭先ではトンビが蝉を捕食、ミヤマカラスのサナギ消失。

日没から夜間昆虫観察会。



虫のエキスパート田下昌志さん、福本匡志さん、筑波大学菅平センターから2人の若者、長野市の20代の虫好きたち。各地から家族連れの参加者多し。田下さんヘラクレスオオカブトの幼虫を入れた容器をいくつかご持参。のちに飼育したい子らに、順次プレゼントする。

8月

イチモンジチョウ蛹・幼虫、ゴマダラ幼虫、ミヤマカラスアゲハ蛹を大川さん確認。

当館仲間の石川豊さんが久しぶりお見えになり終日サポート。甲虫の箱を見直して下さる。村の岩下茂迪さんにキレンゲショウマの大鉢を戴く。玄関先に置く。郷土美術館に「絵画の義民展」を観に行く。鈴木繁男さんの娘さん夫妻がお見えになる。お父さんの標本コーナーと、ロビーの特設追悼コーナーを観て頂く。手を合わせていく仲間が多い。森林組合でコンサート会場の草刈りをしてく下さる。

6日
folklore concert.



今年も十観山の高原にアンデスの音楽が響く。開始のち、雨が降って来たので急きょロビーに移る。「バルデ・オスクーロ・イ・ブランコ」のリーダーうえむら一彦さんの軽妙なトークに魅了される。70名のご参加でロビーいっぱいになる。

10日
Smirnaga Chou Okauchi-san ni matowari tsuku.

よほど好まれているらしい。アケビコノハの幼虫に皆で興じる。

11日
Joindan Komatsu-san ni Zashiki Uchi ni Iki ni Atsuta no Jidai no Zashiki Uchi ni 2 dai de Taikan.

佐久・塩田・上田・青木の小・中学生のいるご家族様たちと終日和やかに蚕三味座繰体験会となる。

高原の夏、ウグイス鳴く木陰に木製の座繰機が軋みながら回転する。糸を巻いたり真綿を作ったり。

途中須坂の蝶の民俗資料館の今井彰さんがお孫さんらを連れて遊びに来られる。サポーター小野沢さんがアイスクリームを



沢山買って来てくださった。スミナガシ・蟬・バッタ・ナナフシ・シデムシ・コガネムシ・・夢中で追いかける子供たち。



坂城町の島田先生（児童館長）がご来館。昆虫協会長野支部事務局で蝶写真家栗田貞多男さんご来館。

14日
Supporter Yano Ikki-san, Sa ga Mushi no Uchi ni Tsuki no 'Kusaki de Tsukurareta Mabuji' nado go jushin.

早速ひきてきた幼虫を入れる。チョウ類保全協会の杉山さんご来館。

山田靖昆虫画に特別なご尽力を戴いた当時の岩国市教育長さん磯野恭子さんご逝去のハガキが届く。再会を夢見ていたため、ショックから抜けられない。2008年に岩国市で山田靖昆虫画展を開催して頂いた際、磯野教育長さん、教育委員会の皆さんは私たち信州勢を歓待して下さい、野原は1週間岩国に滞在させて頂いた。かつて回天のドキュメンタリー映画を作ったという。空ならゼロ戦、海の中では人間魚雷回天である。多くを語らずとも自ずと涙が流れ、深く手を握り合う私たちだった。昆虫画の山田靖さん（大正7～平成22）もまた故郷を後に、あの太平洋戦争で東南アジアに出て行ったのだった。

後々、岩国を訪れるたびに山田さんの御親戚である西教寺さんに泊めて頂いている。長男嗣信氏も地元で自然保護活動をされ、地域を大切にされ父靖さんの昆虫画や民俗画を護っておられる。昆虫画の殆どは2007年当館に寄贈されている。

17日
Joindan Joinshin Kai no Yajima Chiyoko-san go jushin.

10年前、当館周辺の植物相調査をしてくださっ

た。その際、写真や標本資料を戴いた。18日松代スハマノの会より8名様ご来館。オオムラサキ保護活動のお話しやご苦勞に頭が下がる。県環境保全協会会昆虫協会长野支部長茅野實さん、県環境保全協会の皆様と、お弁当持ちでお見えになる。稲荷山の松林典子さんご来館。松林さんは7.17に亡くなられた鈴木繁男さんに最後に会った人。当館ロビーには鈴木さん撮影のジャノメチョウ写真を飾ってある。彼女はそっと手を合わせた。

29日 上田市の方よりテレビ番組で放映された青木村の「弘法炭鉞」について質問あり。

20年ほど前上田市前山の竹内知さんが、昭和初期（小学生頃）頃塩田から青木村の山奥に大人たちと通い、真っ黒になって泥炭を掘った時の思い出を語って下さったことを思い出した。わらじが切れて裸足で働いたと。苦勞人なのに人柄の良すぎるその方もすでに他界されてしまった。

庭のエノキでゴマダラチョウ羽化。オオムラサキもヒオドリも殆んどヒヨドリにやられてしまったが、ゴマダラが生き残ってくれた。

20日 追悼鳩山邦夫さんの最終日。

来館者多数。昆虫協会长野支部の作品搬出。他はご夫人、皆さんのご好意で結局11月末まで延期となった。21日チョウ類保全協会の坪内さんや、黒澤さんご来館。素敵な虫ガールたち田沢温泉ご一泊。坪内さんは保全協会のフェイスブックを担当され、当館の様子やスケジュールをアップして下さる。

当館仲間の長岡泰平さんの蝶の切り絵はとても評判良く、真似てみると、挑戦した上田の父子さんから作品を戴く。

26日 長野市の藤本宗行先生より鳩山さん追悼展のご感想とご挨拶を戴く。

27日 麻績村の地域おこし協力隊山本達也さんから「麻績村の昆虫」を10冊戴く。

29日 ミヤマカラスアゲハ目撃。

小諸風穴サミットに飾る養蚕のパネル作りに入る。

9月 青木保育園生90名様他今年もゆっくりご見学。

第4回全国風穴サミットin小諸にパネル参加。前年の上田風穴サミットに続いて2回目。冷風が吹き出す地形を利用して野菜などの貯蔵や蚕種を保存していた所を風穴という。大がかりな施設を作って蚕を保存していた跡が県内にはいくつもある。その調査研究は、養蚕の歴史に厚みを持たせている。

チョウ類保全協会のわさびさんが、アゲハやオオムラサキのイラストに詳細な観察の様子を盛り込んだフリーペーパーデータを無償で提供される。のちにアサギマダラ、チョウの赤ちゃん特集も送って下さる。当館、特別にコピーを許される。

塩田のため池に発生するマダラヤンマ観察会に館員大川参加。研究会の皆さんの立派な調査研究の論文集を頂く。池田町から女性グループご来館、展示内容を非常に評価される。アサギマダラ舞う。キベリタテハ・ミドリヒョウモンチョウ舞う

17日 「小川原先生のハチ講座」と「歌とピアノのコンサート」（丸川尚子さん・コルナ知子さん）



最終回ということに万感の思いがよぎった。ドクターの講演もコンサートも熱が入り素晴らしかった。有料入館者約60名。(2018も継続となる)

カマキリ・バッタ・ノシメトンボ・ヒメアカネ・コオロギ・アサギマダラを庭先で目撃。ウラギンヒョウモンにモンキチョウ・アザミにアカタテハ群がる。

24日

野菊・嫁菜・月見草・萩・尾花・いよいよ秋。

ビオトープの宮崎さん、今年も春から頑張っ下さる。自家製の巨峰をたくさんご持参、皆で戴く。

30日

鎌倉蝶話会ご一行様11名上田駅到着

お迎えして筑北村の小川原辰雄邸にご案内。古い家の縁側で寛ぐ皆さんの笑顔は極上。のち昆虫資料館に移動し2階の講義室で恒例「鎌倉蝶話会」となる。有志他、若いご家族様らが聴講される。長野市の昆虫愛好家のご住職袖山栄真様ご一家とご参加。温泉宿で濃い虫談義は止むことなく夜遅くまで続いた。70、80、90まだまだ青年。

10月1日午前

鎌倉蝶話会の皆さま十観山の森に入る。

居合わせたご家族様や有志らと山歩き。季節柄あまり多くの種類の虫はいなかったが、葉裏をめくったりそっと枝を叩いたり、やわらかな腐葉土の道をつついてみたり。快晴の空は浅間連山をくっきり浮かび上がらせ気持ちが良い、蝶話会の先生方もご機嫌に見えた。後に芦澤一郎さんが、寺章夫さん発行のCitrina通信No578に老人になった虫とり少年たちその2」第11回鎌倉蝶話会-信州青木村で開催-というタイトルで紀行文を掲載された。この号に転載させて戴く。岩下さんから大きな栗、ビオトープの宮崎さんから今年最後だからと巨峰がたくさん届く。青木の森の大本幹子さんから卓上織機を寄贈される。早速サポーターの小野沢真由美さんが織り始める。千曲市のご夫妻、庭に日本ミツバチとジャコウアゲハが沢山やってくるというお話をされる。

竹内武さんご友人9名様でご来館。日頃マレーシアにおられ、上田氏のご自宅と往来されている。蝶が好きでお友達とよくご来館いただいている。

東京の野平昭子氏より小川原Dr.を通して外国産蝶の寄贈あり。



▲野平暁子氏

役場の女性と3人で村松風穴の調査に行くも、雨後の悪路に阻まれ最後のカーブで引き返す。上小森林組合、朝日放送森林事業で館内ご見学。夜はキャンプ場でパーティーを楽しんできた若者たちが当館ロビーでハーブ演奏を聴く。大阪府立大学生物学大学院生、車に自転車を積んで各地昆虫館巡りで立ち寄る。喜んで観覧くださる。佐久のパラダ昆虫館、須坂市蝶の民俗館を紹介する。長野大学前川教授ご来館。

11月

佐久穂町の佐々木町長さんご一行様ご来館。

防災検査あり。村の女性より「昆虫資料館の入口が暗く、営業しているのか否かも分からず入りにくい。何人も前まで行って帰って来てしまった」とメールあり。分かり易い看板や、入口にオシャレな電気を点けるとか、カフェを！と提案いただく。

村の上原美智子さん制作の竹ランプを玄関に飾る。

マダラヤンマ保護研究会で現地調査と総会。マダラヤンマ研究会は、10年前当館顧問をされておられた安藤裕先生を会長に、塩田のため池に生息する稀少なトンボ、マダラヤンマを研究し保護しようと設立された。のちに市の天然記念物に指定される。以後調査、パトロール、保護の草刈りなどしながら年1回の論文発表をされている。周辺の整備は10年間継続され、毎年貴重な論文が発刊される。メンバー高齢化に伴い、より若い世代や大学との合同研究の道をと！という話が出る。

来春に向け山田靖ギャラリー作品を入替える。

マットの補充、防腐剤の交換、額が必要。虫の名前と絵の照合、不明瞭を調べる。初めてのお客様、当館の企画を褒めて下さる。同時に宣伝不足を指摘される。松本市アザミの会様13名ご来館。庭先草原の平を耕したようにぼこぼこになっている箇所がいくつも見つかる。イノシシがミミズを掘って食べたのか？

16日

ついに雪が舞う。

キタテハ・テングチョウ・ザトウムシ・クモ・カマドウマに会う。水たまりが凍る。東京青木会の皆さまご来館、ゆっくりご高覧。鳩山家で標本他を取りに来て下さった。お借りしていたものをすべて返却。

「温かで、素晴らしい展覧会を開催して頂き、鳩山家一同感謝しています」と戴く。

森の木々は地中深くで繋がっているという。根を通し情報交換しながらそれぞれが生きるための先々1ミリ5ミリという世界が見えてくる気がする。人の世もまた無意識の領域で皆繋がっているように思う。作為のない生きものの世界故の感触か。ご縁というものか。「舞姫たちよ永遠に」展、一区切りとなる。

坂城町児童館の皆様11名ご来館、

26日

周辺の枯れ木枯草で焼き芋大会とランチパーティー



総勢30名持ち寄りも含め、楽しいありがとう会となる。燃やす草木には「山のビオトープ」を継続している女性、宮崎さんの汗がしみ込んでいる。この日、防火訓練を兼ねる。

30日

浅間山系に見事な帯雲、ダイナミックな風景。

最終日ということで上田市の蝶仲間、竹内さんたちが慰労に顔を出して下さいます。

12月2日

第38回筑波大菅平山岳生物センターセミナーに参加。

年1回のセミナーに時々参加して皆さんの研究に耳を傾けている。長い間には学生さんが各地の研究員や学芸員になって活躍されていく。夜間観察会などに来て頂くことも有難い。若く美しい女性の皆さんが、ハチヤアザミウマ、ウミグモ、カゲロウ、カマアシムシ、ケラ、ナマズ、ヤモリ、ナマズ、シミ、ハダニ、カワゲラと、いつもながら地味な虫たちの生態DNAを本気で調べ尽くす。

12月に入っても佐久、上田、青木村他から、初めて来た来館者あり、冷凍庫内のような館内を案内する。残務、資料保存のための作業に入る。

9日

青木村自然を守る会、オオムラサキの越冬幼虫探し。



見つかった分は丁寧に保護され、来年エノキの樹に戻したり放蝶される。夏、チョウになったオオムラサキはクヌギの汁を吸って元気に飛び回り、またエノキの葉に卵を産む。孵化した幼虫はたくさん葉っぱを食べて越冬準備に入る。冬は落ち葉の裏にくっついて静かに春を待つばかり。

寄贈された野平昭子さんの標本、防虫剤補充・同定など、大川さんが大仕事。鳩山さんの蝶仲間、佐久市野沢の長岡勝さん作製のチョウの標本を返却に行く。ご自分の採集に依る愛蔵標本各種の数々を見せて頂く。たまに蝶愛好家と言われる方々の、このような場面に居合わせる。皆さん一緒に、こちらが恥ずかしくなるほど、初々しい少年のはにかんだ顔

になる。他お世話になった各関係者に、返却やご挨拶など続く。

15日
信州ミュージアム・ネットワーク事業博物館美術館等職員研修会、館員と参加。

松本市美術館にて。美術館長小川稔館長、信濃美術館整備室長日向修一氏のご挨拶。東大芸術学部名誉教授竹内順一氏の講義1「学芸員－文化行政担当者のマネジメント力」2「作品のディスクリプション」。実技研修 解説松本市美術館武藤美紀氏。参加者原稿の添削と解説竹内順一氏。

17日
チョウ類保全協会in新宿御苑展と講演会参加

講演：永幡嘉之氏 フランスのチョウと自然
 中村康弘氏 絶滅危機のチョウを守る
 アート展：当館蝶の写真クラブの皆さん参加
 ：蝶の切り絵 長岡泰平さん参加

18～27日
標本管理作業、水道止栓工事、データバックアップ。

各関係ご挨拶他。

岩国市の山田継信さんより靖氏のスミナガシチョウの作品複製の依頼ありコピーを送る。岩国市ではスミナガシを守る会の動向あり。のちに2018年の桧余地ニュース（岩国市周東町桧余地地区）を送って下さる。当館山田靖昆虫画常設ギャラリーの作品たちは、常に静かに居る。

おんふうけつ
 温風穴さがしに沓掛温泉裏の小倉山に入る。雪が残る山肌、石が重なるような場所を目途に、道なき斜面を歩く。先ずは塚原さんが見つける。さらにどんだん上に登った猿渡青年が「ここにも！」と手を振る。それ～っ！と斜面を走る。どこからそんな体力が湧いてくるものなのか。自然の力に引き出される元気というものか。



外気1～2℃、或いはそれ以下でも温風穴の出口は8～10℃くらいにはなっていた。温風穴周りの雪・氷は融け、周りの落ち葉に水滴が光っている。時に緑の草が見えたりするのも目安になる。なぜそのような場所があるか？それは夏の冷風穴の冬バージョンで、下方から取り入れられた冷たい外気が、地中を通過する間に温められて出てくる仕組みである。

それこそ夏は暑い空気を取り入れ、地中で冷やされ出てくる下方の冷風穴の所以となる。理屈はそういう事なのだが、相手はダイナミックな山や岩石や地中の物語である。理屈通りの自然とは、いかに自ずと然りなことかにもむしろ驚愕する。この感動が次の何ものかを生み出す。一度空気になって、地中を通り抜け観たいものだ。

ひとしきり山を歩いて皆で道の駅に行く。名物馬肉うどんとお茶で暖まる。年末となり、2017が終わる。

2018. 1月
ゼフィルス展決定・準備



2月1日～3月25日
ゼフィルス展 開催

於・青木村郷土美術館エントランスホール

3月11日 PM1:30
～ギャラリートーク実施

講師：新部公亮さん（栃木県マロニエ昆虫館）がギリシャ神話と蝶に絡めた楽しいお話を展開。ゼフィルスの由来と各蝶の紹介。一石路の句の紹介、村のハーモニカメンバーの演奏も頂く。

3月
道の駅情報館展示の準備、展示。



▲ウラキンスジビョウモン 2018 林 清弘さん



▲アイノミドリシジミ 2018 桐原重樹さん



▲ 2018. 7.15・村文化会館にて

編集後記

館報No15の発行がすっかり遅れてしまい、各方面の皆さまにご心配を戴きながらようやく出荷となりました。

猛暑の2018年、7月から日本中がヒートアイランドになり40℃を越す地域も続出。熱中症で自宅で亡くなられた方も。次々台風も発生し、「かつて経験したことのない大雨洪水避難警報」まで出るなか、多くの方が被災し、亡くられました。信じられない被災地の映像は7年半前の東北太平洋沿岸の大規模な災害や、各地の地震噴火の姿にも重なり、ただただ茫然とするばかり。

いくら黙祷しても亡くなった方は帰って来ないし、被災された方々に具体的な救援も出来ないからカンパ箱を見かけると僅かに担う。各地にボランティアで応援に行っている人たちを見る度、頭が下がります。

悲慘を忘れないでと、切なる想いが各地現場で「碑」を建立し後世に残されていきます。さまざまな石碑が教える避難勧告や、立ち止まれ回顧せよの祈りを真摯に聴きたいもの。

巨大なプレートがいくつも重なる地震列島ではいつ何が起ころうとも不思議はなく、その環境下で生きなければ、消えていくしかないのだろうか。少なくとも絶滅危惧種の蝶や虫、海のサンゴや鳥たちも、すでにその運命をたどっています。

もの言わぬものたちが目の前で消えてく姿は、人間の生命そのものへの警告のようです。地球は人間だけのものではないことを知らされます。自然の恩恵にあやかりながら、野山を海を空を汚してきた人類ですから、よほど慎重にならないと。

さて、猛暑の7月15日、当館名誉館長小川原辰雄先生の90歳を記念して村文化会館で「恒例ハチ講座とコンサート」を開催しました。診療所のドクターとして半世紀、村人が次々とハチに刺されて来るのを見て、統計を取りながらハチ毒の研究をされてきました。その深い洞察と研究成果を、毎年拝聴できるのは稀有なこと。「年に一度先生の講演を聴いておけばハチに刺されない」と人様に申しいていた私が、この夏は数十年ぶりに2回もアシナガバチに刺されました。よほど慎重にならないと。

9月からは、マダラヤンマ保護研究会、上田自然に親しみ会、広瀬幸雄先生の水生昆虫資料等の公開展が始まります。オランダのスワンメルダム、日本の寺島良案の古書も公開しますのでお楽しみに。(2018.8 野原)



夕陽の中の赤ちゃんカマキリ（撮影・田島 茂さん）

発 行 信州昆虫資料館 2018. 8

〒 386-1601 長野県小県郡青木村大字田沢 1875-6

TEL 0268-37-3988 FAX 0268-37-3964

E-mail:kontyu-s@helen.ocn.ne.jp

印 刷 中澤印刷株式会社

信州昆虫資料館館報№15 追伸号 (2018.9.11)

青木村信州昆虫資料館

長野県小県郡青木村田沢1875-6
tel0268-37-3988fax37-3964
mail : kontyu-s@helen.ocn.ne.jp

夏の繁忙期も過ぎ、虫の音響く青木村信州昆虫資料館です。

さてようやく館報15が出来ましたが、補足・訂正を兼ねて追伸いたします。

昨2017年は、前年6月に逝去された鳩山邦夫さんの追悼展を開催しましたが、そのレセプションは4月29日でした。太郎さん、華子さんのお子さまお二方がそれぞれのご家族さまと共にご参加くださり、チョウを愛し続けたお父様の思い出を語って下さいました。当日はご一緒出来なかった奥様も、後に何回かご高覧くださり、若くして逝かれた夫君のご生前を偲ばれました。5月の連休には兄上由紀夫(友紀夫)さまご夫妻はじめ、蝶愛好仲間の皆さまがご鑑賞下さいました。6月21日のご命日には、木曜社の西山さまが川合さま(本文中河合様になっていますが誤りです。大変失礼しました)とご来館。なお、P12の5行目、色紙をくださった大野義昭さまの字が本文義紹になっていますが間違いです。大変失礼しました。追悼展は8月20日までの会期でしたが、奥さまのご好意で11月いっぱいまで継続出来ました。なお、P11、I4行目読まれたは、詠まれたです。P16下から7行目、嗣信さんではなく継信さんです。P18下から2行目上田氏は上田市です。大変失礼しました。

さて、2013年10月に初めて「鎌倉蝶話会」の皆さまが当館で第7回例会を開催されました。

会員の早野育男氏(本文中、夫になっていますが男です。大変失礼しました)が、当館名誉館長小川原先生の大学時代の2年後輩の方ということでご縁があり、開催の運びとなりました。蝶類研究者磐瀬太郎氏(1906-1970)が1950年9月2日に立ちあげた会で、当時鎌倉の磐瀬氏の自宅にはたくさんの昆虫少年や学生が集っていたそうです。時には江崎悌三氏、田淵行男氏も参加され、のちに東京に転居されてもなお続いていたと。1970年5月に他界されたのち、鎌倉時代のメンバーだった早野育男さん、葛谷健さん、養老孟司さん、平賀壮太さん、布施英明さん(故人)がたが中心になって新鎌倉蝶話会を立ちあげられたとのこと。第7回例会では幹事早野育男さんのご挨拶があり、布施英明さんの「クロツバメシジミの食草」、葛谷健さんの「1978年頃までの関東・中部地方の蝶」の講演がありました。柳本茂さん、牧林功さん、養老孟司さん、久保快哉さん、寺章夫さんがご参加。寺さんは「キトリナ通信」を発行されており布施さんの当館訪問紀行文が掲載されていました。そこで使われたお写真を館報No.12に転載させていただいた次第です。

村内の食堂で松茸料理や温泉一泊を楽しんで下さり、楽しい昆虫少年たちでした。布施さんもとてもお元気でしたが、その後他界されたことを知りました。一昨年は私も鎌倉での例会に参加させていただきましたが、ご子息様にお父様の思い出を語って頂きました。

大切にされていた標本資料などをご持参くださり、お仲間の皆さまがしみじみ思い出を語る場面に、おこがましくも自分が居るのは本当に申し訳ない気がしました。

2017年秋には、第11回の例会を当館で再度開催されました。参加された芦澤一郎さんの寄稿文が今回も寺章夫さんの「キトリナ通信」に掲載され、お願いして全文を転載させていただきました。

文中 p5の2行目 *aldamia imitans* との表記は、正しくは *Aldamia imitans* です。ご兩人さま大変お世話になりました。本当にありがとうございました。第11回例会のご参加者は、早野育男さん、早野俊郎さん、早野健さん、葛谷健さん、養老孟司さん、芦澤一郎さん、中谷貴寿さん、牧林功さん、原田基弘さん、森中定治さん、柳本茂さんの11名様。

また、書店で養老先生の「半分生きて半分死んでいる」(PHP 新書)を見つけました。いつものように面白く読み進めておりましたら、当館訪問の数行を見つけました。また皆さんで遊びに来て下さいますように。

2018年冬と、春～8月20日までゼフィルス展 I (郷土美術館)・II (当館2F 会場)を開催しましたが、郷土美術館の前に、村出身のジャーナリストで俳人の栗林一石路の句碑(1991建立)があります。当館がオープンした15年前(2003)ごろは、誰かの碑があるなあと思っていなかったのですが、その後栗林一石路を語る会による「私は何をしたか」(2010. 信濃毎日新聞社発行)という本により、初めて認識しました。句碑を守って来られた皆さまに敬意を表して、ゼフィルス展ギャラリートーク(新部公亮さん)に先立って、長野市の朗読者奥村和子さんに一石路の句を読んで頂きました。句碑があることを知らない方も多く、鮮烈な句の力と読み手の力に頭が下がりました。

このたび、奥村さんに分かり易く詳細を書いて頂きました。金子兜太師主宰「海程」の俳人マブソン青眼さんの句会にも入っておられ、この冬に開館した上田市前山の「檻の俳句館」の協力者でもあります。マブソンさんは、「檻の俳句館」館主さんです。

なお、2017～2018年にかけて貴重なチョウ標本をはじめチョウの書籍・文献、昆虫各資料、各誌、写真等ご寄贈いただいております。誠にありがとうございました。

9月からマダラヤンマ保護研究会(上田市)10年の資料展、自然に親しむ会(上田市)当館周辺の植物定点観測展・故広瀬幸男先生(上田市)の水生昆虫資料公開が始まっています。

当館の企画行事にあたっては毎回さまざまなご参加者をいただいております。誠にありがとうございます。

また、常々お心にかけてお力をくださるボランティアの皆さま、尊いお姿に頭が下がる想いです。虫を楽しみ、愛しむ人が増えますように。子供たちが原っぱで虫を追いかける姿が永遠でありますようにと、当館周辺森の草木原っぱは、そのまま残してあります。

どうぞお子達を沢山連れて遊びに来てくださいますように。